

チャペル・メッセージ

★今週の聖書：ヨハネによる福音書 20章19～29節（聖書を開けてください。）

★今週の賛美歌：329番（特に2番の歌詞）

★チャペル・メッセージ

私たちが外国語を習い始めるとき、最初に覚える表現の一つに、必ず、その言語での挨拶の言葉があると思います。海外に旅行するときも、せめて挨拶くらいは行った先の言葉で言えるようにしましょう、と覚えることもありますね。今日、皆さんと一緒に読むヨハネによる福音書

20章19～29節の中にも、実は、「挨拶」のことが隠れています。イエスやその弟子たち、聖書の登場人物たちの多くはユダヤ人で、彼等の母語はヘブライ語です。そのヘブライ語の挨拶が、イエスの言葉の中に隠れているのです。見つけられますか？ それは、שלום=シャローム、即ち直訳すると、「平和」という言葉です。

「シャローム」は「こんにちは」にも、「さようなら」にも使えるので、一日のいつであってもこの一言で、誰とでも挨拶できます。「シャローム」は時も場所も相手も選ばない、相手に心から「平和があるように」願う気持ちを伝える、普段の何気ない挨拶の言葉でもあるのです。そして、今日の聖書の物語は、イエスの復活が起こった日の夕方、イエスが弟子たちを訪れ、「シャローム！」と、いつも通りの挨拶をされた、その出来事をめぐる物語です。

ヨハネによる福音書は、復活の出来事が起こった日の夕方、「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」と語っています。イエスはローマ帝国の総督によって、「自分はユダヤ人の王」だと名乗って世の中の騒擾攪乱を企てた「テロリスト」として十字架刑に処せられました。そんな危険人物の「弟子」であると知れたら、自分たちも「共謀罪」でイエスと同じ目に合うかもしれない。弟子たちはそのことを一番恐れていました。そして、これは私の推測ですが、弟子たちは「復活のイエス」が自分たちの隠れ家を訪ねて来ることも恐れていたことでしょう。

その日の朝早く、マグダラのマリアがとんでもない知らせを持って帰ってきていました（先週の話を出して）。「私は主を見た、イエスは復活した」?! イエスが捕まった時、男の弟子たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げました。誰も、イエスを助けようとはしなかったのです。もしもイエスが復活したのなら、そのことをどれほど怒っておられるか。それを思うと、彼らは自分たちが隠れている宿の部屋から一歩も出られませんでした。二重の意味で絶体絶命の危機に震えながら、内側から扉に鍵をかけ、「外出自粛」をしていたわけです。

そこに、どうやってかは解らないけれども、「復活のイエス」が入ってこられて、「シャローム=こんばんわ」と挨拶された、そして。

弟子たちは「復活のイエス」を見て喜びました。十字架の出来事の前、親しく教えを乞い、食事も寝食も共にして故郷ガリラヤからこのエルサレムまで旅してきた日々と同じく「シャローム」と、穏やかに挨拶をして「普段通り」に接して下さった。十字架刑で釘付けにされた傷が生々しく残った手と、絶命を確認するために槍で突かれた脇腹も見せられましたが、そのことで弟子たちを罰するどころか、心からの平和を願うことばで、「普段通り」に挨拶をして下さったからです。イエスは自分たちの裏切りを許し、受け容れ、復活の奇跡の実現を知らせて自分たちを勇気づけて来て下さった。それは弟子たちにとって大きな慰めであり、救いでした。ところが。



Michelangelo Merisi da Caravaggio (1571–1610)
「Incredulita di san Tommaso トマスの不信」
(1599年頃、107×146cm、油彩・画布)

弟子たちのうちひとりだけ、こんな大事な場面に居合わせなかった人物がいたのです。トマス、という弟子でした。トマスは、イエスが姿を消してしまってからその部屋に戻ってきました。「外出自粛」をしていたのに外に出た？とにたく、トマスだけが、復活のイエスを見ることができなかったのです。トマスだけが。他の弟子たちは見たのに。皆、同じく、イエスを見捨てて逃げ、今朝ほどはマリアが「主を見た」と言ったのを聞いて、彼女に不信を抱きつつも、本当だったらどうしよう、と一同で頭を抱えたのに。どうして自分だけ？

トマスの心は引き裂かれます。どうして自分だけ仲間外れに？どうしてこんな仕打ちを？「イエスの生傷に自分の指を突っ込んで確かめるまでは、お前らの言うことなんか信じられない」、というトマスの気持ちに、皆さんは共感できますか？自分だって、イエスが復活したことを「見て」喜びたかった。人から聞いたセカンドハンドの喜びではなく、自分自身の「見る」体験を通して自分の喜びを得たかった。自分も、いや自分こそ、一番復活のイエスを実は待っていた。なのに。

そこから8日目。今度はトマスも一緒にの時に、再び復活のイエスが、「外出自粛」している弟子たちを訪れます。そして最初の訪問の時と同じく「やあ！＝シャローム」と挨拶されました。そして、その日はトマスの名指して、彼にだけ、「ほらこことこの傷にさわって確かめてごらん」と、以前と同じように、親しく、なんでもないことのように語りかけられたのでした。そして「さあ、信じる者になりなさい」と招かれました。

皆さんはトマスが、イエスの傷に指を突っ込んで確かめたと思いますか？それとも、もう、そういわれただけで満足し、「信じる者」になった、と思いますか？福音書の記者は、トマスがどうしたか、教えてくれません。ただ、トマスが、そう語りかけたイエスに答えて「私の主、私の神」と、彼の、イエスへの「信じる気持ち」を告白した、と記しているだけです。

今日のメッセージと一緒に掲載している絵画は、カラヴァッジョという16世紀後半から17世紀初頭にイタリアで活躍した画家の作品です。1月に大阪でカラヴァッジョ展が開催された折、私は、この作品を鑑賞する幸いを得たのですが、この絵画の題名は「トマスの不信」。皆が見た、というのを信じるべきなのは分かっているが、どうしても自分でも確かめたい、だから信じられない。信じる気持ちと信じられない、信じたくない気持ち、また、復活を喜ぶ気持ちと仲間をうらやみ素直に喜べない気持ち、そうした相反する二つの気持ちに心を引き裂かれて迷うトマスを、手を取って引き寄せ、自分の傷に触らせることで、トマスの引き裂かれた心をもう一度、一つの、「喜んで信じる」気持ちに回復させ、イエスから送られる挨拶に、いつものように、なんでもなく応答できる「平和」の中へと招き返す、そんな場面が生々しくも力強く描かれています（カラヴァッジョは、トマスは傷に触った、という解釈ですね）。

そして、トマスとイエスの背後にいる2人の弟子（たぶんペトロとアンデレの兄弟）も、この様子を「ガン見」しています。彼等もトマスの体験を「見る」ことで共有しようとしているかのようです。「見た」のだから、真実に違いない。だって「見た」のだから。

しかし、この物語の結末は、「見る」ということの重要性を、すっかり覆して終わります。「見ないで信じる人は幸いだ」というイエスの言葉は、トマスのみならず、復活の出来事が起こってからここ8日間、「私は主を見た」かどうか、そのことで大揺れに揺れ、分裂を体験した（女性たちも含めた）弟子たち全員に向けられているでしょう。マリアが「見た」と最初に他の弟子たちに伝えた時、男たちは皆、マリアの証言への不信と、もし本当だったら、という「信じる気持ち」に引き裂かれたことでしょう。その引き裂かれた気持ちが一つになったのは「自分も見た」からでした。そしてそれはトマスも8日遅れたけれど同じ手順でした。イエスはしかし、ここに問題提起をされました。

「見たから信じたのか、でも、私は自分の死と復活については以前から何度も話してあったらろう？」イエスからすればそういうことなのです。「見た」ことに頼る、ということは、自分の感覚や知識や経験といった、限られた範囲でしか世界を捉えることをしない、自己中心な視点です。しかし、「信じる気持ち」は、この「自己中心」の視野の外へ踏み出す勇気のあるものだけが得る「限界突破」の領域なのです。

「限界突破」への挑戦に、イエスはいつも軽々と「やあ！みんな。そんなあなたに平和があるように」と、

私たちを送りだしてくださるのです。

【祈り】

自分中心の「限界突破」に踏み出す私たちに、あなたの平和を与えてください。

アーメン。